

令和5年度 第1回伊丹市文化振興ビジョン策定懇話会 議事概要

内 容	令和5年度 第1回伊丹市文化振興ビジョン策定懇話会
開催日時	令和6年1月18日(木) 10:00~12:00
開催場所	伊丹市議会棟 2階 第2委員会室
出席委員	中協会長、岩崎委員、上田委員、衣川委員、吉田田委員
会 議 次 第	
1 開会 (1) 開会挨拶 (2) 懇話会委員自己紹介 (3) 資料確認 2 議題・意見交換 (1) 会長の選出、会長の職務代理について (2) これまでの伊丹市の文化振興とこれからについて (3) その他関連事項 3 閉会	
発 言 要 旨	
【議題(2) これまでの伊丹市の文化振興とこれからについて】 中協会長： ・伊丹の文化振興については事務局説明のとおり。まずは委員の皆さんがそれぞれ実践されている各々の現場、その中で抱えている課題感とか、思いみたいなものを聞かせていただきたい。 岩崎委員： ・演劇は市民に一番浸透しやすいものだと考えている。 ・コミュニケーション手段に演劇のスキルを使うと市民同士の交流に繋がりやすい。 ・演劇の手法を使ったワークショップは、アイホールの存続がどうこうではなく、もっといろんな場所で展開されることが有効と感じている。 上田委員： ・市民意識調査の「文化芸術活動を行う」の「行う」は、実際に自分が絵を描いたり歌ったりパフォーマンスすることなのか、それともそういう機会・場づくりをしたいといっているのか。 ・試しにやってみることができるアンテナ的な拠点や、そういうことをやってみたいと思う人のコミュニティを作っていくような仕掛けを考えてみるといいのでは。 ・フェスティバルゲートの運営に参加した時、6団体くらいで知恵を絞りながら場を作っていた。場を作って色々な人が参画することで芸術振興がなされていくという経験をした。 ・そういう拠点と機会を作る仕掛けを用意して、そこに参画したい人たちと協働するというイメージが湧いた。 吉田田委員： ・説明を聞いて、結局「お客さん」が増えただけのまちになってしまったように感じた。 ・芸術文化のプレーヤーが来て、それを鑑賞する機会があるのでそこは素晴らしい。鑑賞できるからみんな満足。でもクリエイターやアーティストが住み着くまちにはなっていない。	

- ・いわゆる「面白い人達」が集まってくるまちにしないと、文化芸術は進んでいかない。そういう人達を受け入れるにあたっては、スモールな取り組みがいっぱいできるのがいい。
- ・完成されたところにはクリエイティブは残っていない。小さな文化芸術や芸術と呼べないにかがひしめいているようなまち、ある程度雑多で混沌としているところに芽吹いてくる。

上田委員：

- ・一つの視点だけで上手くいくことはなく、いくつかが緩やかにつながっていることが大事。
- ・大きい場所と小さい場所がお互いにつながりあうことで循環が生まれる。つながるための仕掛けや仕組みが必要。

岩崎委員：

- ・長野県上田市の上田映劇という古い映画館は不登校の子どもたちを受け入れており、映画館に行く学校と学校の出席扱いになる。
- ・文化施設と、いわゆるマイノリティの方々とのつながりの好事例。

衣川委員：

- ・伊丹は専門に特化したホールが多い。多目的ホールではない施設を作ること一つ先の未来を見据えていた。今は逆にそれが足枷になってしまっているかもしれない。
- ・「演劇・音楽・ダンス・美術」というようなジャンル分け自体がナンセンスな時代なのかも。
- ・専門に特化するほどプロユースになる。市民が遠く感じる原因はそこにあるかもしれない。
- ・劇場に行くことは非日常、ハレの場という特別感があるが、日常的に、混沌とした雑多な中でクリエイティブなものを自分の中で見つける場のほうがいろんな面白い発想の人たちが集まってきたり、新しいものがつくられたりする土壌になる。伊丹はそこが弱いのでは。
- ・グリーンジャムなど、伊丹は民間・市民から湧き上がってきたものが醸成されているので、連携の仕方や横断する仕掛けがあればうまく回るように思う。

中協会長：

- ・吉田田委員のいうような、芸術とも言えないようなところに何かあるのではないかということにも通じるが、何かが混ざることのほうがいいのではないかと思う。
- ・なんか面白いと感じたり、子どもが喜ぶことなら関わりたいと思っている親の層は一定数いるので、そういうことの可能性や連携もある。それがこれからの「複合的な形」ではないか。

上田委員：

- ・釜ヶ崎芸術大学は「まち」を大学に見立てるという言葉から始まっている。喫茶店のふりをしながら365日開いていることで地域の人に信頼してもらったり、参加した人がまた足を運んでくれたり。
- ・それと同時に、足を運ばない外部の人が「その講座なら興味あるから行ってみる」ということで交流が生まれ、友達ができるといった循環が起こっている。
- ・既存の場所と、そこに足を運んでもらえるような機能をマネジメントする。芸術があって、循環を作る仕組みを考えたい。

衣川委員：

- ・小さいことを複数回手を変え品を変えやり続けて発信していると「そういうことはどうやったらできる？」と聞きに来る方がいる。フレンテでは高尚な見せ方をしないようにしている。

中脇会長：

- ・伊丹は商業者がすごく元気。にぎわい活性のための飲食イベントなどスポットで活動しているが、文化施設のパートナーになるという感覚の中間支援団体のような人たちは全然見えない。
- ・連携や循環は、行きつくとコーディネーターの存在が大事になってくる。

岩崎委員：

- ・北九州は地域に入っていく職員がいる。キーになる人から商店との連携につながる。

中脇会長：

- ・属人的な部分に頼ることになるが、そういう人を雇うと宣言することも必要ではないか。

吉田田委員：

- ・補助金や助成金は大きな額でなくていい。5万円ぐらいをすぐに出し、評価は行政職員も一緒に参加してデータ化すればいいのでは。
- ・ちょっとした取組みをすぐにできる状態を作っておくことが大事。そうすれば、スモールプレイヤーがたくさん生まれてざわついていくと思う。

上田委員：

- ・20代を京都で過ごした。当時青少年勤労青年会館のようなものがあり、そこに行くといろんな人に会えて、企画の打合せがすぐにできた。
- ・私もワークショップのような事業をやっていたが、その企画を見ていた職員に2万円で何か事業をするよう勧められたことがある。

衣川委員：

- ・大きな額になると何かちゃんとしたものを作らないといけなような感じになる。
- ・ワークショップや小さなライブなど、とにかく数をやる。それぐらいのものをたくさん、いろんな人がやりだせば、その場所を何か楽しい雰囲気の方角にもっていけるのではないか。
- ・大きなお金が動けば行政側もしっかり評価しなくてはならなくなるように思うが、2万3万ならそれでなんとなくにぎわっていて、それでいいという雰囲気を作れるのではないか。

中脇会長：

- ・とはいえ公金は、額が大きくても小さくても同じ扱いを求められる。ルールだけが厳しい5万円の補助金がいっぱいできて困る。そこは検討が必要。

衣川委員：

- ・市民と一緒に何かやる際5万円使えるということを、施設が采配できるといいかもしれない。そういう小さな動きの中で、プロユースではないことを市民と一緒にできるのではないか。

中脇会長：

- ・文化施設は使いたくなるような雰囲気が大事という話があったが、作り込みすぎない、雑多なほうがいいという意見と相反するものではない？

吉田田委員：

- ・一緒のこと。きっちりでき上がっていない状態のほうが思いつきがある。古民家なら「カフェができそう」というように。最初からきれいに整っていると誰もカフェをやらない。
- ・場所自体がもっている力はとても大きくて、生まれるものって場によって結構左右される。
- ・全国的に公民館ができていった時代はDIY精神がすごく溢れていた。簡単に集まって話し合っ、その本番をそのホールでできる、そんな雰囲気が生まれたらいい。

中協会長：

- ・「使いたくなる」というのは、便利とかおしゃれとか豪華とかではなく、Do It Yourself、自分で作っているという獲得精神が養われるようなもの。そういった余白は、それを設計することは難しいが理念・想いとしてはそういうこと。
- ・ここまでたくさんのヒントをいただいている。小さいことをたくさんできるようにすること、作り込みすぎないこと、属人的でいいのではないかということ、コーディネーターのこと、雑多な、芸術と言われる以前のものがまずあるということなど。
- ・他の自治体の文化施設をみると、どこも施設の果たす役割が多目的になっている。その中で専門施設はフラッグとしてすごくいい。シンボルとしての劇場は、これからどうあればいいか。

岩崎委員：

- ・劇場で全国的に取り組まれているのが「広場」や「遊び場づくり」。
- ・富士見市は、毎月特定の土曜日を子どもたちに開放し、演劇はせずただ遊ばせている。そういうことをすれば市民の関わり方も違ってくる。
- ・ただ実際にやろうとすると、子どもの怪我など管理の問題があって難しい。

吉田田委員：

- ・絶対に良いことなのに、反対意見が結局ただのクレームで終わってしまっているのでは。
- ・それをクリアするために進んでいかないといけないのではないか。

上田委員：

- ・現行指針の第3段階に「対話を通して」と書いている。この対話の仕掛けや対話のための機会づくりや場づくり、対話をどのようにして「通す」のかが大事。
- ・結論ありきに話すのではなく、みんなで話していく中に、落としどころをゆっくり探っていくことになると思う。

衣川委員：

- ・「対話を通して」「文化芸術がそばにあるまち」はどこの自治体でも書くようなことだと思う。その中で、伊丹市はどこにフォーカスしていくのか。
- ・これからの自治体のあり方の中で、全部を網羅することは絶対に無理。ある程度どこかに特徴づけていいのではないか。
- ・「社会包摂」も言葉が独り歩きしている。本来の意味での社会包摂はそれぞれのまちによって違うはずなのに同じことをやろうとする。どういったことがそのまちでの本当の社会包摂かを考えなくてはいけない。

中協会長：

- ・伊丹市は施設の機能が点在しており、回遊性が高い。住民の密度も高い。回遊性が高いがゆえに「混ざる」が難しいと感じる。

吉田田委員：

- ・偶然性にかけていくしかないのでは。偶然が生まれやすいようにする。

上田委員：

- ・大阪市の「にしなりベンチプロジェクト」は、ベンチを作りたい人がベンチを作り、それを置いてくれる方たちと協働するというように工夫している。ベンチがあると人が集まる。

吉田田委員：

- ・こういうプロジェクトをやろうというプレーヤーが軽やかに動けたら良いと思う。

岩崎委員：

- ・ 現行指針の「文化芸術がそばにあるまち」という言葉に対して、文化芸術は「そば」ではなくて「なか」だと意見した。この文脈だと「文化芸術が一生懸命仕事をしている私のそばにあるまち」というように読めてしまう。
- ・ 人々の中には、文化を享受する力や、外に出していく力があるということを信じて、まち自体が変わっていくということが信じられるようなビジョンになるほうがいい。

中脇会長：

- ・ 次回は、子どもや障害をお持ちの方の文化芸術について意見交換できればと思っている。

以上